



第13回企画展「人生儀礼～誕生・結婚・葬送～」は9月30日で終了いたしました。お越しいただいた方々、どうもありがとうございました。
(内海)

人生儀礼～誕生・結婚・葬送～

52・53号に引き続き、明野歴史民俗資料館 第13回企画展「人生儀礼～誕生・結婚・葬送～」の中から、今回は「葬送」についてお話しします。

人が亡くなると、まずは隣の家、そして組長に伝えられました。葬儀の日取りが決まると、他の村の親類や寺に、組から「オトムライアカシ」と呼ばれる連絡が行きました。オトムライアカシは、必ず二人一組で、提灯を持って出掛けました。

遺体は北向きに寝かせて、顔の上に白い布を被せ、胴の上には魔除けのために鎌などを置きます。枕元には、茶碗にてんこもりに盛って箸を一膳立てた「枕飯」を、祭壇には、蕎麦粉もしくは玄米を挽いて作った「枕団子」を供えます(写真1)。近親者などによって、遺体を清める「湯灌」が行われ、その後、晴着に経帷子など旅支度を身に付けさせました。遺体を棺に入れる時、本人の愛用品など以外に、三途の川の渡り賃である六文銭を納めます。遺体を棺に入れることを「ニッカン」と呼び、作業する者は、藁縄で縛った襷をかけました。縄は左に縛ったもので、結び目は「オタツ(たて結び)」。日常の逆の様式を用いるのは、死忌に対する意識が働くからです(写真2)。

葬儀に参列する人々の服装は、昭和初期までは女性は白無垢でした。戦中から戦後にかけて、服装は次第に黒に統一されていきました(写真3)。

家の中に祭壇を作り、そこで僧侶による読経が行われ、その後、座敷から出棺して墓へ向かいました。棺を担ぐのは、死者の甥などから4人が選ばれました。棺を担ぐ者は藁草履を履いていきましたが、帰りには、墓に埋めたり、畑に捨てました(写真4)。墓に着くと、簡単な斎場が設けられ、線香を焚きながら読経が行われ、その後、墓穴に棺を納め、枕飯や枕団子などを投げ入れ、土をかぶせます。

墓からの帰り道は、行きとは違う道を通らなければならず、これは死者の霊がついてくることを恐れたからです。家の入口に塩と水が用意されていて、それで体を清めてから入ります。葬儀が、2人目の親を送った「親送り」の場合、家の前で空白を搗きますが、これは、魂は白のような容器に入っていると考えられていて、空白を叩くということは魂を屋外へ追い出すため、などの説があります。

葬儀の翌日には、「テラオクリ」と称して、死者の遺品や泊り米などを寺に持っていきます。これは、死者が四十九日間、寺で過ごすための仏事です。四十九日には、搗いた餅49切れを寺に持っていきます。餅を搗く音で、死者の魂が棟から離れると考えられ、この日で忌中明けとなります。

3号を通じて、北杜市の人生儀礼について紹介してきました。

かつて、当たり前のように行われていた人生儀礼の中には、すでに絶えてしまったものも多くあります。一方で、現在も続けられているものもあります。ぜひ、その意味を感じとっていただきたいです。



写真1

枕団子(『須玉町史』所収)



写真2

ニッカン(『須玉町史』所収)



写真3

葬儀(『須玉町史』所収)



写真4

葬列(『山梨県史 民俗編』所収)